

薔薇
屋敷

立原正秋

薔薇屋敷 立原正秋 新潮社





薔薇屋敷

昭和四十二年七月二十日 発行
昭和四十八年一月十五日 四刷

定価 四三〇円

著者 立原正秋

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社 新潮社

東京都新宿区矢来町七一
電話東京(260)一一一番(大代)
振替 東京八〇八番

(乱丁、落丁のものは本社又はお買求めの書店にてお取替えいたします。)

印刷・株式会社金羊社 製本・神田加藤製本所

© 1967 Masaaki Tatihara Printed in Japan

目次

薔薇屋敷	5
流鏑馬	89
死の季節	123
海浜点景	187
暗い春	207

装
幀
村
上
芳
正

薺
薇
屋
敷

薔
薇
屋
敷

一

安芸周二が、横浜の薔薇屋敷で、黒人女のメアリとはじめて会ったのは、八月の末であつた。淀んだ空気が充ちている暮方の部屋で、周二は、だるい頭でその黒人女を見ていた。黒人女は、部屋の入口で、薔薇夫人と英語でなにか話しあい、廊下を奥の方に歩き去つた。

「新入りですか？」

周二は薔薇夫人を見てきいた。

「そうね。新入りというところね」

薔薇夫人はいつもの無表情な顔と抑揚のない声で答えた。

「あの女をよこしてくれますか？」

「いいわよ。名はメアリというの。二階にあがっていらつしゃい。後で行くように言っておきますから」

周二のほか、男はまだ誰もきていないらしかつた。

周二は二階の部屋にあがると、ベッドに横になり、せむし 僂男が用意してくれた阿片を吸引した。

吸引が終ると、僂僂男は煙管と火を持って部屋を出て行った。しばらくして、周二が夢見心地の状態をつかまえたとき、メアリが入ってきた。はちきれそうな胸が、赤いギンガム地の夏服に包まれていた。

「いつからここに來ているんだね？」

周二がきいた。

「おぼえてないわ」

メアリは日本語で答えた。

「日本語ができるのか」

「すこしね。三十ドルでいいけど、あんたの都合はどうなの？」

「ああ、いいよ」

するとメアリはすぐ服を脱ぎはじめた。

薔薇屋敷に出入りしている外人女は、たいがいは軀の線が崩れ、乳房や下腹の肉がだぶついていたが、メアリの軀はひきしまっていた。

「としはいくつだ？」

「二十四歳よ」

メアリはこっちに背中を見せてブラジャーをとりながら答えた。いい軀をしていた。とりわけ、後ろに突きでた尻は、見えて小氣味がよかった。それからメアリはベッドに入ってきた。メアリの軀は、柔軟な鞣革なめしがわを思わせた。強い体臭を消すためか、軀に香水をふってあったが、

体臭と香水が入りまじって言いようのない匂がした。一口に言ってそれは動物的な脂の匂だった。

ベッドにはいつもゴム製品が備えつけてあったが、メアリはその使用を嫌い、ハンドバッグから錫のチューブを取りだし、これを使ってくれ、と言った。チューブからは、薄荷の匂がする透明なクリームが出てきた。

メアリとすごしたのはこの夜だけで、それから二カ月間、周二は週に二度の割で薔薇屋敷にでかけたが、メアリにはあえなかつた。気まぐれな娘だから、来る日が一定していないのよ、と薔薇夫人は言った。メアリの素姓は判らなかつたが、近くのアメリカ軍基地にいる、と推定するのがもっとも妥当だつた。

薔薇屋敷の話をきいてきたのは、友人の加山達哉であつた。紹介者がなければ入れない、というので、加山が手蔓を求めて紹介状を貰ってきた。紹介状を書いてくれたのは、自宅は鎌倉にあり、横浜の馬車道に銃砲店を構えている男で、名刺には、後輩の加山達哉、安芸周二を紹介します。よろしく。薔薇夫人様。と認めてあつた。五月はじめのことであつた。

五月のある暮方、二人は、それでは行こうか、桃でも食いに、とたがいをうながし、紹介状をふところにして横浜にでかけた。

「こうやって酒をのみ女と遊びくらしてきながら、どうも俺は、果てしなく続いている単調な道を歩いてきた、としか思えないよ」

桜木町駅で降りたときに周二が言つた。

「エリオットの詩のような台詞だな。ま、それでいいじゃないか。おまえは、人生になにかを求めているのかい？」

「判らん」

「俺は、桃が食えりや、文句はないよ。いろいろちがった味の桃が食える、俺はそれで満足するよ。戦争を考えるのはいやだ。戦争末期、おまえも俺も高等学校に入ったばかりだったな。戦争が終ってやれやれと思ったら、こんどは朝鮮戦争がおきた。それがおさまったと思ったら、世界のどこかでまた戦争だ。ヴェトナムでは百年戦争が続いていると言う。昭和三十五年のいま、僕に見えるのは、桃だけだ」

「もう、たがいに、三十もなかばになろうというのに、いつまでも桃だけ食っているわけにも行くまい」

「いや、俺は一生食うよ」

そうかも知れない、俺も、加山の言うように、一生桃ばかり食って暮すようになるかも知れない、と周二は、それまで出あってきたいろいろな桃を想いかえた。新鮮な桃、腐りかけた桃、爛熟した桃、と数えあげたらきりがなかった。加山とは中学校からずうっと一緒に歩いてきた仲で、大学でも同じ英文科に籍をおき、中退したのもいっしょだった。アパートを六軒持っている加山は、そこからあがる金で生活していた。一戸のアパートが八所帯で、合計四十八所帯からあがる家賃が、月に七十二万円あった。俺のような怠けものには打ってつけの商売だ、と彼は言っていた。

薔薇屋敷は、中区山手町の地藏坂の近くにあった。大きな坂から枝葉のように小道が傾斜して四方に広がっている石畳の道には、古い横浜の匂が充ちている、そんな場所の一角であった。

二

季節は十一月、樹木の多いその住宅街に、朽葉の匂がいっぱい広がっている夕暮、周二は、久しぶりに加山とつれだって薔薇屋敷にでかけた。

周二の記憶にある夕暮は、いつも湿っぽく、朽葉の匂がした。そのくせ、それを眺める彼の心はいつも乾いていた。それは季節にかかりあいがなく、いつも同じだった。彼がそれを加山に話すと、あたりまえだ、と加山は答えた。

「あたりまえとは、どういうことだ？」

「つまり、俺達は、いつも、陽の目を見ずに暮しているから、その匂しか嗅ぎわけられなくなっている。しかし、ちょっとおかしいぞ。安芸、おまえは、自分が病み果てている、と思っているのか？」

「そうは考えない」

「そうだろう。俺達はきわめて健全だよ。今夜、あの黒んぼ女に当たるといいが」

「いたら、どっちがとる？」

「じゃんけんで決めよう」

二人は坂道を登りながら、じゃんけんをした。加山が勝った。

四角い石を敷きつめた地蔵坂の途中には、横浜ハリスト正教会が建っている。その前を登りぬけて左に折れ、二十メートルほど行くと、右に切り通しの下り坂がある丁字路に出る。角に、七本の丈高い槐えんじゆに囲まれた古びた二階家があり、半分ほど葉の落ちた樹間の奥に、青銅の屋根が鈍く光っている。家の北側には、高さ十メートルはあろうと思われる馬刀葉まてばし椎が三本そびえている。これが、安芸と加山が五月いらい通い続けている薔薇屋敷である。道路から一メートルほど引った所が出入口で、門はない。いったいにこの辺には門のない家が多い。開港時代の開放的な名残りなのだろうか、と周二は折々考えた。家の南面の石垣の下は道路で、石垣のはずれに、庭を刳りぬいて建てた車庫があり、なかには黒塗りの旧式の乗用車が一台入っている。

二人が家の前まできたとき、車庫から車が出てきて、出入口に横づけになった。運転席には紺サージの詰襟服を着た五十がらみの坊主頭の男がかけている。薔薇屋敷に出入りしている者は彼を番人と呼んでいた。不愛想で無口な男だった。こっちが話しかけない限り、自分からは挨拶しなかった。傲慢ととる人もいたが、あたえられた仕事以外のことに自分を割りこませるのは嫌いな男らしかった。しかし用を頼むと、彼はそれを果してくれた。彼は、昼間は庭の手入れをしているか、車を掃除していた。彼は、車庫のなかの小さな地下室に住んでいた。

加山が運転台わきの窓を叩くと、彼は車のなかから窓をおろした。

「どこかへ出かけるのかい？」

すると番人はだまっとうなずいた。

「すぐ戻るのかい？」

「奥さんの御用がすみ次第もどります」

「済まんが、帰りに、煙草を買ってきてくれないか」

加山が財布から金をだしているあいだ、周二は薔薇屋敷を眺めていた。西陽が家の二階のガラス窓を五彩に染めていた。このとき玄関が開き、ベルトできつちり腰をしめた黒い外套に、短い鍔の帽子をななめに被った冷たい表情の女がでてきた。なぜそこが薔薇屋敷と呼ばれ、また女主人が薔薇夫人とよばれているのか、周二は知らない。たぶん、この家に出入りしている男のうちの誰かが名づけたのだらう。いま玄関から出てきた薔薇夫人は、黒皮のハンドバッグを左腕に通して提げ、右手に黒い手袋をにぎっていた。

「おでかけですか」

加山が話しかけた。

「二時間ほどで戻りますわ」

彼女は会釈すると、車の戸を明けて乗った。番人は前方を向いたままエンジンをかけ、やがて車は坂道をゆっくり降りて行った。

誰も薔薇夫人の年齢を知らなかった。四十にはなっているだろう、と言う人もいたが、それも臆測にすぎなかった。つまり、薔薇屋敷に娼婦を求めてくる人達のなかで、夫人の古くからの知人が一人もいなかったのである。古い方で五年前から出入りしている男がいたが、彼の語るところによると、五年前もいまと同じだったそうである。番人の詰襟服も、客と娼婦のあいだを取りもっている僮僕男の居ずまいも五年前と同じだし、下働きの婆やも変わらず、出入りしている人達

が年を五つとったほかは、なにひとつ変化はなかったのである。また、みんなは、薔薇夫人の夫なる人を知らなかった。玄関に、足立浩二と標札がさがっていたが、その人を見かけた者がいなかった。別居しているのかもしれない、と薔薇屋敷を紹介してくれた銃砲店主が言ったが、これも推測にすぎなかった。

車が坂道をおりてしまつてから、周二と加山はしばらくそこに立っていた。

「あれは男を迷わせる顔だね」

加山が言った。

「そうかね」

「美人ではないが、あの冷たさが逆に男の心をつよく乱す結果になるのさ」

「おまえ、口説いたのか？」

「俺は口説きはしない。誰も成功しなかったときいたから、はじめから片想いでいる。久保さんは、四年間、あの顔の冷たさに惹かれてこの坂道をのぼり続けてきているが、俺にこう言つたよ。一度でよいから、あの顔がほぐれ、世間の女なみに、おかしさで笑いころげるところを見たい、そうしたら、この呪詛のような片想いも解けるだろうって」

「なんだ、それは？」

久保というのは、二人を薔薇屋敷に紹介した銃砲店主だった。

「知らんのか。あの夫人は笑わないんだよ。で、俺は、久保さんに言ってやった。あの薔薇夫人の裡では、なにかのきっかけで情緒が死に絶えた、と思われるから、あきらめて一生片想いのま